

大人が絵本を 第90回 元気が湧く



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子*

小児歯科医師 濱野 良彦**

* 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)
** 医療法人元気が湧く 理事/ファウンダー

🐧 コロナはつづくよ、どこまでつづく

α、β、γ…といえば、ギリシャ文字でしかなかった時代は過ぎ、現代ではアルファ、ベータ、ガンマ、デルタと聞くと、新型コロナを連想してしまいます。WHOが昨年5月31日に発表した新型コロナウイルス変異株の命名システムには、なるほど～！でした。

次から次へと変異するコロナウイルスに翻弄される生活が2年を過ぎました。超長期戦を、国民ならびに全人類が一丸となってウイルスと戦っているのですが、大人には子どもたちを守る使命が課せられています。より一層の支援で、子どもの生きる力を高めましょう。

日本列島にも寄せては返し、何度も暴威を振るうコロナウイルスは、2021年6月下旬から始まった第5波ではデルタ株が主流となって、国内の1日の新規感染者数が過去最多の25,851人を記録したのち減少に転じ、11月22日には2021年最少の50人と発表され、張りつめていた空気が緩みました。

振り返ると、第1波の感染者数は5波の比ではなかったのですが、突如襲ってきた得体の知れない新型コロナは、専門家による「未知のウイルス」という情報と、「自粛生活」や「緊急事態宣言」などそれまで耳にしたことのないワードによる通告を受け、さらに死者の報告数に、ただ恐れ脅えるしかありませんでした。

第5波の波が引き、気の緩んだ私たちを襲ってきたのは、またも変異したオミクロンという名のコロナウイルスで、あろうことか子どもにも蔓延して、最多といわれた第5波の感染者数を大幅に上回ったのです。こうして2022年の幕開けも、コロナウイルスに脅かされ振り回されることになりました。

心も身体も疲れ切っている皆さまへ、元気が湧くお話をお届けいたします。

🐧 元気が湧くエピソード

「うんとこしょ、どっこいしょ、まだまだかぶはぬけません」。

この有名なフレーズは知らない人はいないので

はないでしょうか。幼稚園生の頃、8歳年上の姉がよくよんでくれた『おおきなかぶ』という絵本です。

姉は生まれつきの脳性麻痺で肢体不自由ということもあり、私が物心ついた時は、学校には通えず家庭教師と学習している姿が当たり前でした。私も姉の学習中、一緒に御座ってぬりえをしたり、学習終わりにおやつを食べたり、今思えば邪魔していたのかもしれませんが。

姉は身体が不自由なだけで、読み書きも得意、頭の回転も速くおしゃべり好き、まだ小さかった弟の世話を追われる母に代わり、私のお世話役となっていました。一方で私はいつもぼんやりした性格で姉は口先で私に指示をして、出来ない事を出来る私が指示通りに動くという、お互いが助け合う関係でした。

読書好きな姉は絵本の読み聞かせもしてくれ、この『おおきなかぶ』もよく読んでくれました。物語をアレンジして読んでくれたりもして、特に思い入れのあるアレンジは、登場人物に我が家の家族が次々に現れ、飼っていた犬まで登場します。そしてみなでおおきなかぶをぬくのです。



手にするときは！

「かぶ」のおはなし

企画 濱野 良彦

構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)



『おおきなかぶ』
アレクセイ・
ニコラエヴィッチ・
トルストイ 再話
内田莉莎子 訳
佐藤忠良 画
(福音館書店)

姉の読んでくれる『おおきなかぶ』の中だけでは、普段歩く事も踏ん張る事も出来ない姉も一緒にかぶをぬく事が出来るのです。

お話のアレンジはかぶがぬけた後も続き、かぶを近所にお裾分けして、残ったかぶでシチューを作って皆で食べて終わります。お話が終わっても幸せな気持ちになりました。

そんな姉、今では実家を離れ一人暮らし、車の免許証まで取得し、身体が不自由な事を忘れるくらいアグレッシブに絵手紙作家として立派に自立をしています。何でも挑戦する姉は、おおきなかぶをぬいた時のように、皆の力を借りれば出来ない事なんて何も無い、私も負けないように頑張らねばと自らを奮い立たせてくれる存在です。

絵本の日アワード in FUKUOKA 2021

元気が湧く賞 古賀幸子さま (福岡県)

絵本『おおきなかぶ』



おおきな気づき

昔話絵本『おおきなかぶ』から生まれたこのエピソードは、絵本の日アワード in FUKUOKA 2021で、元気が湧く賞を受賞した作品です。元気が湧く賞とは、「絵本の“エピソード”から新しい“気づき”をいただき、その“気づき”から元気が生み出され、大きくなる」という私たち医療法人元気が湧くの願

いをこめた賞です。だから、私たちの法人名がそのまま賞の名称となっているのです。毎年、“元気が湧く賞”に託す願いは、それだけ思い入れの強いものとなっているのです。

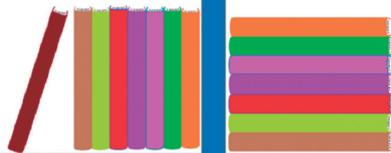
『おおきなかぶ』にもつ古賀さまのエピソードは、コロナの時代にあって、とりわけ大きな“気づき”をいただけるのです。西田さまのお姉さまは、妹である幸子さまに絵本を読んであげたというよりも、2人で「読みあう」ことで姉妹が体験を共有して楽しみ、喜びを分かち合っていることがうかがえます。

コロナに日常を奪われて、窮屈な思いに苛まれている私たちは気づかされるのです。制限された生活にあっても、そこでの楽しみを見つけ、チャレンジすることを忘れないでいれば心は豊かになれるのだと、冷静に受け止めることができるのです。そう気づかされると元気が生み出され、行動に移すことで人として大きくなれるのです。

「お話が終わっても幸せな気持ちになりました」、これに尽きると思えたエピソードには続きがあって、私たちはますます元気になるのです。それは、絵手紙作家となられたお姉さまが、今、創作活動を通して多くの人々に元気を与えているという現在のエピソードです。絵本からつながる縁を強く感じる、元気が湧く賞2021です。

日本だけの「うんとこしょ どっこいしょ」

ロシアの昔話『おおきなかぶ』は、日本では複数の画家と再話者に手掛けられた絵本が20冊ほど刊行されています。元気が湧く賞を受賞された古賀幸子さまとお姉さまに寄り添っていたのは、日本でもっとも親しまれている福音館書店発行の、佐藤忠良画による絵本です(左上)。



福音館書店の『おおきなかぶ』がはじめて登場したのは1952年の月刊「こどものとも」で、1966年に絵本として単行本化されました。すなわち、日本で70年読み継がれ、愛されているロングセラーなのです。

『おおきなかぶ』は年齢を問わず、誰しもの記憶の一片にあり、誰かが読み始めると一緒に掛け声をあげてしまう不思議な魔力があります。小学1年の教科書に採用されていることが大きな理由でもありますが、他にも、まだ言葉を話せない赤ちゃんと読みあうと、「うんとこしょ どっこいしょ」の繰り返し遊びで非言語コミュニケーションが生まれるのですから、やはり魔法の絵本というわけです。

令和生まれの子どもたちもお気に入りの「うんとこしょ どっこいしょ」は、福音館版訳者である内田莉莎子氏の翻訳家としての力量とセンスに他なりません。『おおきなかぶ』の原話はロシアの民話『かぶ』なのですが、その原話を日本語で直訳すると「ひっぱってもひっぱってもぬけません」と表現されるのです¹⁾。

ロシア語の文法的形態からくる響きの美しい魅力は、日本語では伝えることができないと言われていたところを、リズムだけは残した翻訳に苦勞したと内田氏は語っています。「ストーリーがクライマックスへ盛り上がっていくリズムと呼吸を感じてほしい」と考えた内田氏が出した結論が、「うんとこしょ どっこいしょ」なのです¹⁾。苦しみながら選び出した内田氏のこの表現ではなかったとしたら、『おおきなかぶ』の親しまれ方はまた違うものになっていたのかもしれない。

ビブリオキッズで親子と司書が読みあうと、かぶを引っ張るシーンでは「うんとこしょ どっこいしょ」のフレーズを親子で唱和しながら、かぶを引っ張るポーズをするのですから、ことのほか盛り上がるのです。



ことばと絵が共鳴しあうと

「うんとこしょ どっこいしょ」と思わず力んでしまう掛け声を、さらにパワーアップさせるのは佐藤

忠良氏の力強い画です。

佐藤忠良氏といえば、戦後日本を代表する彫刻家です。その高名な彫刻家が絵本の画を描いたことには、松居直氏の「絵本」というメディアに対する熱い思いが働いているのです。当時、少し甘い感じの童画が流行していたとき、福音館書店の編集に携わっていた相談役の松居氏が、芸術の力を子どもに伝えることのできる絵本をつくりたいと、彫刻だけでなくデッサン力にも優れていた佐藤忠良氏に依頼したのです。

世界的な彫刻家は、鏡に向かって引っ張るポーズをしてはデッサンを繰り返すのですが、どうしても押しつけているように見えてしまうため、納得のいくまで描き直したという逸話を松居氏は著書で明かし、その努力の成果だと評しています。それが内田莉莎子氏の、まったく無駄のない簡潔な言葉づかいによる訳文と「画文一如」であると、松居氏大絶賛の作品なのです²⁾。

その松居氏を高く評価するのは、児童文学研究者の藤本朝巳氏です。絵本の成否は、実は編集者の力量が大きく関与するところ、題材にふさわしい作家と画家を結びつけ、二人の力を引き出した編集者・松居直氏の傑作と述べています³⁾。絵本は、作者と画家の能力だけでなく、編集者という大きな力が作用して生まれる芸術文化なのです。



『絵本はいかに描かれるか
(表現の自由)』
藤本朝巳 著
(日本エディタースクール出版部)

画家が観察と描写を重ねた結果の“おじいさん”は、かぶを引っ張るどのシーンでも、足先から頭まで渾身の力をこめていることが伝わってきて、読んでいる者も自然と力が入ってしまうのです。もちろん、おばあさんも孫娘も、トライ&エラーを繰り返して何度でも力の限り前の人を引っ張っていることが分かります。

その一方で、次の助っ人を呼びに行っている間の



脱力した身体と表情の落差には、フッと笑ってしまうほど、その描写力に感嘆してしまう絶品なのです。

『おおきなかぶ』も糾弾にあった!!

日本の昔話と同じように、本国で複数の再話者に語られている『おおきなかぶ』は、日本の小学1年国語教科書で1968年より長く採用されています。最初に掲載されたのは福音館版と同じく、A.トルストイ再話版を内田莉莎子氏が翻訳したものです。1977年には、西郷竹彦氏が日本語の言語感覚を重視して再話したものが加わり、現在でも二作品が採用されています。これら二作品の表現方法の違いにより、教材比較研究の報告も多数あるほどです。

挿絵については佐藤忠良画が多いなか、光村図書はロシアの画家を起用しています。これには、教科書問題の歴史が絡んでいるのです。それは、絵本の抹殺問題に大きく関わる表現の自由と、思想の問題です。

そもそも、西郷竹彦氏が執筆した「『おおきなかぶ』指導の手引き」が自民党員の目に留まったことが発端でした。「おじいさんの労働を前提に集団的労働を学ばせ、団結を子どもたち自身の問題として考えさせる」という西郷氏の解説に、『おおきなかぶ』攻撃が始まるのです。1980年代はじめのことで、自民党広報誌において集団労働や団結を学ばせる社会主義的な民話だと非難を浴びます⁴⁾。

そのとき、教科書協会会長を務めていた光村図書の当時の社長が、この攻撃にひるみ、「貧乏物語」と指摘された『かさこじぞう』とともに、当時、佐藤忠良画を採用していた『おおきなかぶ』を教科書から外すと発言するのです。すると、今度は二つの作品を愛する人々から抗議を受け、光村図書は結局、作品を残すことに決めました。

しかし、右に流され左に流される対応しかできなかった教科書会社が、元の鞘に丸く収まるはずがありませんでした。光村図書のそんな姿勢を佐藤忠良氏は批判して、絵の掲載を許さなかったのです⁴⁾。

本質を議論するより先に、その場しのぎをしようとする悪しき慣習で過去に絵本が抹殺された歴史の教訓を掲げて書物と向き合うことが、書物に携わるすべての人々の使命だと断言いたします。

リズムを楽しみ、呼吸を感じる

「ストーリーがクライマックスへ盛り上がっていくリズムと呼吸を感じてほしい」と、内田氏が『おおきなかぶ』にこめた期待は、教育出版の『小学1年教師用指導書』でも語られています¹⁾。

『「おおきなかぶ」のおはなしー
文学教育の視点から』
田中泰子 著
ユーラシア研究所・ブックレット
編集委員会 企画・編集(東洋書店)



西田さまとお姉さまが、ご家族を加えながら「大きなかぶ」を抜くクライマックスへ盛り上がっていくリズムと呼吸を、エピソードから感じとれるのです。お話が終わっても幸せな気持ちになれたこのエピソードこそ、内田莉莎子氏、佐藤忠良氏に伝えたいものです。

さて、皆さまの歯科医院で『おおきなかぶ』を読みあうと、どのような化学反応が生まれるのでしょうか。順々にかぶを引っ張る過程を楽しみながら、リズムと呼吸を感じ合い、コロナに負けない元気が湧き上がってきますように。



文献

- 1) 田中泰子:「おおきなかぶ」のおはなしー文学教育の視点から(ユーラシア・ブックレット119), 東洋書店, 東京, p.16-51, 2008.
- 2) 松居 直: 絵本のよろこび, 日本放送出版協会, 東京, p.127-130, 2003.
- 3) 藤本朝巳: 絵本はいかに描かれるか(表現の秘密), 日本エディタースクール出版部, 東京, p.51-77, 1999.
- 4) 山住正己: 教科書問題とは何か(岩波ブックレットNo. 21), 岩波書店, 東京, p.2-10, 1983.